生かし屋キラー

活字の錬金術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生かし屋キラー

【Ｎコード】
Ｎ８２４７Ｙ

【作者名】
活字の錬金術師

【あらすじ】
一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように生まれる命もある
この物語は人を殺さない殺し屋の話である

ムゥーウ

一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように
生まれる命もある
この物語は人を殺さない殺し屋の話である
エピローグ~依頼~
「じゃあな」「また明日」「おう！仕事がんばれ！」
飲み会が終わり店から出てくる男たちの声が響く
「里田武か・・・」
突然空から声がした
里田武と呼ばれた男はふと上を見上げる
ビルに立っている男が目にはいった・・・
「殺し屋キラー執行！！」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・
時はさかのぼる・・・
ボリッボリッ　せんべいをかじる音がきこえる建物
そこには『キラーん家』と書いてある布がぶらさがっている
ザーザッザザーッ　ゴゴゴゴゴー！
ちょうど台風の来る時期であった
ガラッ！！！！キラーん家とかかれた建物の戸が開かれる
「いらっしゃい・・・なんかあんの？」
ゴロロロロッロ！
戸をあけた男の後ろで雷が鳴る
「殺してほしいんだ・・・」
「里田を・・・アイツを！！！！」
「アイツのせいで！！アイツのせいで俺の会社はZONYとの交渉
が・・・！」
「ふぅーん」

興味なさそうな声がきこえる
「そいつどこにいんの？どんな顔？」
男は懐から写真を取り出し　里田がよくいく飲み屋を教えた
「さーて仕事すっかなー」
殺し屋キラー
～人を殺し依頼主にみせ金を受け取る　シュミと自分で言っている～

～第一章～
ムゥーウ

里田が見上げた先には仮面をかぶって　黒い服を着ている男がいた
男はこちらへとんできた
高層ビルの上から跳んできた・・・
もう一度
高層ビルの上から・・・跳んできた
高層ビルだ！！！高層ビルの上から跳んできたんだ！！自殺！？
つきの光で落ちる男は光る
だっ！！！！！！！！！！！！！！！！！
見事に着地した！しかし男の足はまったく震えていない
どういう体をしているのだ！？
黒い男の左目が光った
『ビビッビビッ』
『身長171．5ｃｍ』
『ウエスト70ｃｍ』
『ＢＣＤがＣＯ　ＦがＣ』
『腰から100ｃｍは・・・』
『ーーーーーーーーーーーーーーー』
『この情報を元に死体作成・・・・』

ビビビビッビビビビビビ
男の右手から光が出た
そこには里田の死体があった・・・
「俺の死体！！？？」
ザッ！
手！？暗くてよくわからないが五本の棒のついてるもの
がかおに近づいてくる
　おそらく手だ
手が顔についた時
バチバチと火花をちらして体がビリビリと破けていく
痛みはない・・・
ただただ自身のからだが破けているのを眺めているだけだった
ビチビチビチバチッバチッビー！
『うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！』
黒い男は言った「俺は殺し屋キラーと呼ばれているでも実際には人
を殺していないんだ
死体のダミーを依頼主に見せて金を受け取るっていうのがおれの手
口さ」
「んで　お前が生きてるってばれたら厄介だろ？だから隠すんだおれの作った理想郷へ」
「ムゥーウへ！！！！！！！」
ブオッ・・・・・！
光が飛び散るとともに
丸い広場のようなところについた
城のようなものはあり　噴水もある
・・・・デジャヴュ・・・
どこかでみたことがあるような感覚だ
「あーここに来たやつはみんな既視感があるみたいなんだよ」
「よくわかんねーけどなぁ」

「!?そうだ!!!なんなんだよここ!?」
「ここ?あームゥーウっつーところだよムー大陸ってしってるだろ
それから名前とった
おれに死体ダミーを作られたやつらはみーんなここにいるんだよ」
「はっ!?いみわかんねーよ!?なんでこんなところにいなきゃい
けねーんだよ」
「はぁー・・説明だるい!!!」
「お前らが生きてるってばれたら厄介だからだよ!!!」
「んじゃ死体ダミー見せて金もらってくるから!ちょっとまってろ
よぉ!」
「ちょっ・・おっ・・・」
「・・・・っ!」
バタッ
「どうぞ!これくらい痛めつけたけどコレでどうだい?」
「あぁ・・こいつだ・・・こいつを殺してほしかったんだ!ありがと
う・・」
「ん」
「ん?」「ん」「ん・・・」
「ああ!金ですね!」
バタッ!
男は依頼主から金を受け取り光を出しながら消えてった
ジリジリビッ・・ビッ
「あっ!!!おめー!!!おれはこれからどうすればいいんだよ!」
「あーあーうるせーなー　だ!か!ら!ここで!!!!おまえは暮
らすんだよ!」
「な!ん!で!」
「こっちが何でだよ!何で理解できないんだよ!」
「おまえはあっちの世界で死んだことにしたの!!!だーかーらー
!!おまえをあっちの世界においてったら　おまえが見つかって
おれがペテン師ってことばれちゃうだろ?」

「わかりましたか？」
「じこちゅー・・・」
「なんか言った？」
「自己中心的！！！！！！っていったんだよ！！」
「うっせっ！・・・あっ！・・・」
「ちょっと一緒に来てくれ・・・付け根が痛む・・・」
「何でオレがこんな目にあわなきゃいけないんだよ」
なんやかんやいいながら里田は男へ付いていった
「なぁお前キラーって言ってるけどさ本名なの？」
「ん、ああすぐにわかるよ」
「？」
「ついたぞ・・・このオンボロアパートだ」
「・・・周りは噴水とかあってきれいなのにここだけ汚いな・・・」
「建物とか黒いだろ？これさ、でかいガスバーナー使ったりしてる
女がいるんだよ
そいつが黒焦げにしちゃってんの」
「怖いな」
「ああ、怖い」
ガチャンッ！！！
「おー美央！！付け根が痛むから見てくれよ！！」
美人がそこにすわっていた
真っ黒な髪の毛が肩までいっていて
フードのついた服の上から工場の作業服を着ている
童顔で赤い頬をしていて大きな目
里田のタイプであった
「んー・・・また痛くなったのどこ？みせてみて」
美央が立った
「うあっ！？」
里田はおもわず叫んだ
「へっ？」

口を大きくしてぽかーんとしている美央
「フードの上に作業服はわかるぞ・・・わかるぞ・・・」
「ミニスカにニーソックスっておまあああああっ!?!?!?!?
萌えーーーー」
「変態めが・・・」
鋭いキラーの声
「おまえにニーソックスのよさがわからないか　絶対領域の黄金比を守ってるじゃないかこの美央って子!!!
ちなみに黄金比は4：1：2．5　だ!!!」
「いやー実にいい絶対領域だ」
「ジロジロ見ないで気持ち悪いから」
「え・・・・」
「もう一回言うね　ジロジロ見ないで気持ち悪いから」
「気持ち悪い・・キモ・・・キモチ・・・ガーン」
キラーはため息をついた
「おい美央んなことより見てくれよ」
「あっごめん　えっとぉ・・どこ?」
「右の肩だよ」
「ちょっとみせてみてー」
キラーは服を脱いだ
そこには3つの縫い線がはいっていた

美央の手が動きナイフのようなものを取り糸を出したそして注射器をだし
とても複雑な作業をしている
キラーのからだを縫っているようにもみえただ切断してるようにも見える
「医学方面に特化していない自分にはよくわからねー　何やってんだこれ」
「んあ?医学方面に特化しててもわかんねーよこれ　神様からの天

罰だから」
「はぁ？」
「よし！オッケー！ちょっと動かしてみてよ！！」
キラーは腕をぶんぶんふった
「おお　痛みが消えたありがとう！　また痛くなったらくるよ！じゃっ」
「あっ　ちょっとまって　骨と筋肉のチェックするからそこに寝て」
「んあー」
下には大量のパイプのようなものとＳＤカードのようなものが大量にある
機械と聞いて頭に思い浮かべられるようなものだ
そこには平らな板がありそのうえに大きな板がおいてある
キラーは板と板の間に横になった
「ちょっとこっからは見ちゃだめね」
美央は里田の目を手で覆った
「えっ？」
「すこしグロテスクだから」
びしっべちょっぶっ　べちょべちょうぶっ！
「ねえ　何でニーソックスなんかすきなの？」
「わかんねーよ男はたいていニーソックス大好きだよ」
「ふーーん　生人はじろじろみてこないのに・・」
「はい！？なんかいいましたか？」
「なにもいって「お楽しみ中すいません終わったんで帰っていい？」
「ちょっとまってすぐに結果出るから」
「あーいーよいーよ　結果は後でメール送ってきてくれよ」
「んじゃっ　いくぞ里田」
「わかった　じゃーあとでメール送るね」
「そろそろ目隠しやめてくれない？」
「あっごめん」

「あまり体いためちゃだめよ生人」
「おうっ　じゃあな！」
バタァンッ
「ふぅーん・・・ニーソックスって・・・萌えるんだぁ・・・」
「！何考えてるんだ・・・あたし」
「おまえキトっていうの？」
「ん、あー　そうだけど　だからさっきいったろ　すぐわかるって」
「あいつおれのこと生人ってよぶからさ」
「おあついねー」
「たしかに暑いな」
「そっちじゃなくて」
「？」
「それにしてもお前のその体どうしたんだよ・・・」
「縫い目ばっかりじゃねーか」
「天罰だよ」
「天罰？」
「神様がさ　おれに与えた天罰　「おまえのような人間には天罰が必要だっ」て！」
「だからおれは今人を殺さない殺し屋やってんだ」
「え？」
「いや・・・言い過ぎた　なんでもねー」
「気になるだろが！！！」
「うっせぇななんでもねーっつってんだろ！」
「いや気になるって！」
「う！る！さ！い」
「いずれかわかるんじゃね？」
「いずれかっていつだよ」
「しらね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8247y/

生かし屋キラー

2011年11月24日17時51分発行